

「名人」の指導に学ぶこと ——各活動内容や指示の裏にある指導観を探る

はじめに

1998年4月号からスタートした本連載も36回目の今回で幕を閉じることになった。その大切な最終回を、コーディネータのお1人である酒井氏は大胆にも本連載の解説経験のない筆者に1ページ増で任せるといっているのである。それは、筆者が「『名人』の授業の共通性」ということを研究しているのに興味を持たれたからだという。

そのような事情もあり、本稿は過去35回とは形の上でも内容的にもやや趣を異にすることをご了解いただきたい。通常の「授業者」が自分の授業実践を紹介し、「解説者」がその授業の分析をするというスタイルではなく、筆者がある3人の「名人」の授業を取り上げ、それらを分析する中で浮き彫りにされた特徴やその裏側にある授業観等を紙幅の許す限り紹介するつもりである。

授業の「名人」とは？

ところで、授業の「名人」とはどのような教師を指すのであろうか？ 本誌のバックナンバーを読み返してみると、過去にも何度かその説明が試みられている。ただ、それらは現場教師である筆者とは視点が異なっているので、まずは筆者が考える「名人」の条件を示すことにする。

1. 授業の展開が明快かつ論理的である

「どうしてそこでその活動をするの？」「その順番で教えちゃ生徒は理解できないよ」などという疑問を見ている者に抱かせないのはもちろん、目の肥えている参観者をも「う～ん、なるほど、そうか！」とうならせる授業展開ができる。

2. 目を輝かせて活動する生徒を育てている

授業は教師と生徒の相互作用で成り立つものであるから、日頃の指導の良し悪しは授業中の生徒の顔と動作を見れば一目瞭然である。1. がどれほどうまくても、生徒不在の一方的な展開をしている教師は「名人」ではない。

3. 英語の運用力が高い生徒を育てている

英語は使えるようにならないと意味はない。3つ目の大切な点は、生徒に十分な英語の運用能力を身につけさせているかということである。1. ができていても、2. ができていても、最終的にこの点が満たされていないと「名人」とは言えない。

以上の3点を高いレベルで満たしている教師をここでの「名人」と定義することにする。

「どのように」指導するか

よい授業をするためのアイデアを示す方法としては、「何をするか」を取り上げることが多い。本連載の過去の号もほとんどそれにあてられている。しかし、経験の浅い教師やなかなか授業がうまくできないと悩んでいる教師にとっては、実は「何を」よりも「どのように」の方が重要ではないであろうか。これまでに多くの授業を見てきた筆者は、「どのように」が上手かどうかで授業成否の大きな分かれ道だと思っている。

そこで、ここでは筆者が「名人」と考えている3人の中学校教師の授業のある場面を取り上げ、その指導の妙を紹介することにする。「ある場面」に限定するのは、その場面を見るだけで学べることは山ほどあると考えているからである。方法は、授業をつぶさに観察してすべての指導事項を抜き出し、それぞれがどのような考えのもとに行われたのかを直接本人に確認するというものである。

① 青野保先生の場合

「名人」の1人目は埼玉大学教育学部附属中学校教諭の青野保氏である。氏は教職13年目にしてすでに見る者をうならせる実力を身につけている。公立中学校在職時から評判の高かった綿密な授業準備と配慮の行き届いた授業マネジメントは、特に若手教師のお手本となるものである。

ここでは筆者が突然訪問して見せていただいた

平成11年9月29日第6校時の授業(中1)の中から、2. (1)Review Reading を紹介する。

- ・ テープを使わず、教師の Model Reading を聞かせた
- ※指で読んでいる場所を追わせていた
- ・ 教師について Choral Reading をさせた
- ※部分的にかなり感情表現やリズムを強調していた
- ・ 教科書を閉じさせ、教師がわざとまちがえて読んだ所を答えさせた
- ※全員を立たせて、答えられたら座らせた
- ※座らせ方にバラエティーがあった
- ・ Buzz Reading をさせ、机間巡視をして読めていない生徒を指導したり、質問を受けつけていた
- ・ 総時間を2分と区切って、1文ずつ順番に個人読みをさせた
- ※時間内に2周目に入った
- ・ 2分たったところで1文ずつ指名して個人読みをさせた
- ・ 最後に指名してペアで読ませた
- ※教科書に書いていないことをつけ加えて言っていた

青野氏の授業で表面上に表われているものの特徴の1つは、生徒に何かをさせる時には必ず教師・生徒共に目に見える形にしていることである。例えば、教科書を黙読させる時には読んでいるところを指し示させている。この指導方法に対しては異論が出るかもしれないが、「どこを読んでいるかをしっかりと認識させ、目に見える形にして活動の様子をモニターしやすくする」という目的においては理にかなっていると言える。また、全員に何かを言わせる時に立たせることについては、「全員に確実に言わせる、速く考えさせる、活動結果を目に見える形にする」という目的で行われているそうである。さらに、個人読みをさせる部分の一連の流れは、「1行読めれば全部読めることがわかります。全員にチャンスを与える、速く

集中して読ませる、他の生徒の読みを緊張して聞かせる、ただの読みではなく自分の立場で言うことに発展させるためにやっています」という目的があつて行われているのである。

青野氏の授業では、生徒全員が実に生き生きとした表情で終始楽しそうに活動している。また、入学後半年足らずで個々の生徒が自分を表現することに慣れている。しかも、どのような問いかけに対してもほぼ全員の生徒がニコニコ顔で挙手をして発表する。これらは1つの指導項目をもないがしるにしない氏の細かな配慮のたまものである。

② 蒔田守先生の場合

「名人」の2人目は筑波大学附属中学校の同僚の蒔田守氏である。「体を切り売りしている」と言われるほどのエネルギー、よく鍛えられた生徒の姿を見た教師は、誰もが「蒔田ワールド」にはまってしまう。また、筆者に「名人」には名人たるわけがあり、それを研究する価値があると思わせた張本人でもある。

ここでは平成11年11月12日に行われた公開授業(中3)の中から、5. What Do You Think? というペア活動の指導を取り上げる。

<前略>

- ・ ファンファーレつき音楽を流した
- ・ プリントを表にするように指示した
- ・ 今回の活動の4つのトピックに言及した
- ・ トピックを選ぶこと、それについて話すことを考えるよう指示した
- ・ ジャンケンでどちらが先に言うかを決めさせた(ここで先の音楽を止めた)
- ・ 活動開始を指示して別の音楽をかけた
- ※生徒は相手の話をマッピング(メモ)しながら聞いていた
- ・ 机間巡視しながら数組にコメントしていた
- ・ リズムマシンの音(音楽中に編集済み)で交代を指示した
- ・ 音楽が終わると、生徒は自然に話をやめた
- ・ ファンファーレ(編集済み)を流し、次の活動

私の授業・私の工夫

開始を宣言した

<中略>

・リズムマシーン(編集済み)で終了を合図した

蒔田氏が行ったこの活動は、ある事柄に対して自分がどう考えているかをペアで伝え合わせ、その後聞いた内容を他の生徒に伝えるという内容である。氏は類似の活動を数年前から継続的に取り入れているが、「ALT とのチーム・ティーチングを始めてから特に気になっていたんだけど、JTE と ALT が話していたり、ALT と一部の生徒が対話しているのを聞かせているだけだと、生徒は「お客さん」になってしまって、主体的な言語活動を行う時間がかえって少なくなってしまうんだよね」と本活動を設定した目的を述べている。本活動中は、生徒がほとんど休む間もなく自分のことを話したり、相手の話を聞いたりするように仕組まれているのはそのためなのである。いかに個々の生徒に実質的な「話すこと」「聞くこと」の機会を与えるかということに主眼が置かれた見事な活動の設定と言えよう。

この活動における蒔田氏のもう1つの工夫は、リズムや BGM を効果的に使った演出である。具体的には、まずファンファーレつきの音楽を活動の開始時と終了時に流し、1つの完結した恒例の活動を行うことを生徒に印象づけるようにしたことがあげられる。次に、活動の場面の変化に対応してリズムや BGM も変え、それを新しい段階の活動に入ったことの合図とした。そして、これらのリズムと BGM をあらかじめ編集してタイマーとして使い、時間内に無駄なくスピーディーに活動させようとしたのである。これらの演出上の工夫によって、下手をすればガラガラとしがちな生徒の自主性に任せた活動を、全体を通してメリハリのきいたものにできたと言え、しかも時間切れで尻切れになったりしないですんだわけである。

蒔田氏が実践されているリズム & BGM の効果は絶大である。氏の同僚である筆者もその手法を日々の授業で真似させてもらっているが、これ

によって授業がそれまでとはまるでちがうイメージとなり、もはやこれなしには自分の授業は考えられないというほどになっている。

③ 中嶋洋一先生の場合

「名人」の3人目は中嶋洋一氏(富山県砺波市立出町中学校教諭)である。人間愛に根ざした授業内容、完璧なまでの授業展開、育てた生徒の素晴らしさ等を総合して、氏はまさに「日本一の英語教師」と言える。中学校教師の間ではカリスマ的存在で、氏と一対一で話をすると信念のやわな教師はもろくも崩れ去ってしまう。

ここでは中嶋氏が平成11年10月14日に実施された公開授業(中3)から、4. Information Gap & Reporter という、生徒が初めて読んだ文章の内容を相手に伝える活動の指導を取り上げる。

- ・プリントの受け取り方を説明した
- ・説明がわかったかを OK? You got it? と確認した(生徒は Yes! と元気に答えた)
- ・3分間で読むことと、活動後にレポーターになることを強調して説明した
- ・説明がわかったかを確認した
- ・surprising information にマーキングすることを ALT に指示させた
- ・タイマーを持ちながら巡視・指導した
- ・残り時間(1分, 30秒)を言った
- ・活動を終了させ、プリントを裏返すように言った
- ・壁に向かって3分間練習することを説明した①
- ・タンバリンを2度鳴らしたら戻ることを説明した
- ・開始を宣言し、巡視・指導した
- ・3分後にタンバリンを鳴らして戻るように指示した
- ・情報を覚えたか? もっと時間がほしいか? を尋ね、延長時間を申告させた②
- ・2分の延長時間を与えることを宣言し、自分の席で読ませた
- ・ALT にレポーターになることを再度言わせ

た

- ・残り時間(1分, 30秒, 10秒)を言った
- ・パートナーに自分の情報を伝えるように言った

た

- ・立たせて場所を移動させて対話させた

<以下略>

さて、授業分析の目の肥えた読者の方なら、この観察記録を読んだだけで中嶋氏の指導のすばらしさを理解できるであろう。しかし、そのすべてをここで指摘するスペースはないので、ここではすぐにも読者の方が自分の指導に生かせる2点のみを取り上げることにする。

下線①の指導は、中嶋氏ご自身は「スピーチの練習は基本的には空で言わせることが大切だと思っています。(中略)頼る物があれば人は努力しなくなります」と考えて実施されている。ワークシートを持たせたままでやらせる指導はもっての他として、実はそこをクリアした教師でも生徒に十分な練習時間を与えずにすぐに目標とする活動に入ってしまうことが多いものである。これでは生徒は自信をもって望むことができず、結果として質の高い活動にはならない。「生徒は自分がやろうとすることに自信がもてれば意欲的に活動するものです」という生徒の心理を真に生かした指導の例と言える。

下線②の指導はさらに筆者をうならせた。生徒に活動時間を与えるとき、並の教師なら必要・十分な時間を与えてしまうが、中嶋氏は5分かかると見込んだ練習時間に最初は3分しか与えなかった。「最初から十分な時間を与えてしまうと、生徒は集中して取り組もうとしません。」つまり、緊張感を与えることが質の高い活動をさせるための大きな要因になっているというわけである。ところが、氏のすごいところはこれだけではなかった。さらに生徒に How many minutes do you want? と尋ねて必要な時間を申告させたのである。普通の教師なら、OK, I'll give you two more minutes. としてしまうところである。その理由を氏は「必要な時間を申告させれば、生徒

は自己責任を持って活動します」と述べている。そして、最初に十分な時間を与えなかったことと合わせて「知りたいと思う、上手にできるようになりたいと思うハングリーな気持ちにさせることが大切です」と、この一連の指導の意図を語っている。

ここで取り上げた指導上の留意点の効果は筆者自身が実証済みである。昨年度、附属高校との人事交流で教員になって初めて受け持った高校1年生の OCA 授業で、中嶋氏が実践されたのとほぼ同様の内容の活動を筆者が行ったところ、生徒はそれまでには見られないくらい意欲的に活動した。そして授業後には、「久しぶりにやりがいがあったよ」という感想を多くの生徒から聞いた。

「技」ではなく「魂」を盗め!

ここまで3人の「名人」の授業の一部をそれぞれ別の切り口から紹介してきたが、授業の表面上に表われていることだけでは3氏の指導のすばらしさは伝えきれないと考えている。また、これまでに言及した技術的な部分を、目の前にいる生徒の実態を考えずにそのまま自分の授業に当てはめても絶対にうまくいかないということは改めて強調しておきたい。3氏が自分の生徒をここまで育て上げるために、何を、どのように考えて実践してきたのかを理解して初めて、「名人」の技を一般化できるのである。中嶋氏が取材の最後に「[技]だけを盗んでいく人がいますが、それだけではダメです。[魂]を盗んで欲しいのです」と言われたことが今も脳裏に焼きついている。

おわりに

今回は、「名人」の授業を取り上げることで本連載がねらうところを少しちがった角度から著してみた。ただ、スペースの関係もあって十分に意図を伝えきれないと感じている部分も多々ある。本稿の内容に関心を持たれた読者の方は、拙著ホームページを参照いただきたい。

<http://village.infoweb.ne.jp/~koinuma>

(肥沼: 筑波大学附属中学校)